

宇野瑞木氏の博士号（学術）学位請求論文『孝の表象とその機能——二十四孝説話を基点として』は、古代中国に生まれ東アジア社会に広く浸透していった孝について、二十四人の孝子の事跡を説話化した二十四孝が中国と日本においてどのように表象されたのかを明らかにしながら、その発生・展開・変容の意義を総合的に解明した労作である。

従来、孝は儒教の徳目として主に思想史の中で語られてきたが、近年の考古学、美術史、説話文学の各分野における研究の進展により、その図像的表象と宗教的儀礼における語りの重要性が指摘されるようになった。しかし、それぞれの学問分野において、孝に関する研究の蓄積が個別になされるということはあっても、それらを横断的に結びつけ、しかも中国と日本を含む東アジアという空間においてそれらを総合的に把握する試みはほとんどなかった。本論文は、孝に関する重要な図像資料と文字テキストを網羅し、個別研究を博搜しながら、東アジアにおける孝表象の全体像を提示しえたという点で、研究史に新たな段階を画したものと言える。

論文全体は、序論、本論、結論からなる本文編と、図版、基礎資料、表からなる図版資料編の二分冊からなる。

序論は、魯迅「二十四孝図」から始め、近代において否定された孝の背後に、「封建的孝道」に還元されない別の孝の可能性を示唆し、孝の全体像を探究するための方法論を述べる。それはすなわち、孝に関する図像と説話を当時の文脈に開いた上で、地域差や時代差に注目しながら孝の複数の意義を浮き彫りにするという、「説話表象文化論」である。

本論第一部「図像の力」は、中国の墓に刻まれた図像を分析した上で、孝子伝図から二十四孝図への転換の意義を明らかにする。第一章は、後漢の武梁祠堂に刻まれた画像石にある扶桑樹の図像を分析し、それが雲気とともに地下世界と仙界を繋ぎ、死者を仙界に連れていくものであることを論証する。子孫の孝心とは親を昇仙させることであり、その結果として昇仙した霊から福を得ることができるのである。第二章は、主に六朝期の墓域に刻まれた孝子図を分析し、儒教だけでなく道教・仏教・ゾロアスター教の諸図様が融合したために、死後の安息が複数表象されていることと、人間界と天界が地続きになって超自然的な奇跡が同一画面に組み込まれていることを指摘する。この変化は時間性からも説明される。つまり、墓における孝の機能は、親である死者を、有限的な直接的時間性から、永続する円環的時間を生きる祖先へと変換することであるが、漢代においては二つの時間性が截然と区別されていたのに対し、六朝期はそれが融合したというのである。第三章は、北宋から金代にかけて、孝子伝図に代わって二十四孝図が登場し、その後広く流布していくプロセスを検証する。仏教が本格的に受容されたことと、版本の挿図という新しいメディアの登場によって、構図やモチーフに大きな変化が生じた。すなわち、孝の表象の中に「割股」や乳房の切り取りといった自己犠牲に加えて、父親だけでなく母親への孝行が強調されるようになったのである。結においては、こうした二十四孝が社会全体に広く受け入れられた社会構造が論じられる。すなわち、宋代においては、科挙によって官吏の家が世襲制でなくなったことと家産均分の慣行のために、家が存続の危機に瀕したが、その家を宗族としてあらためてまとめ上げる原理として、二十四孝が広く受け入れられたのである。

第二部「語りが生起する場」は、仏教の語りの場において二十四孝がどのように語られ、変容していったのかを論じる。第四章は、唐代の仏教寺院において庶民が二十四孝を語る際、たとえば郭巨説話に典型的であるように、母性もしくは母の恩を強調するように変奏されていったと指摘する。それは、儒教の孝が子から親への一方向なものであるのと違って、仏教の孝が親の恩愛とりわけ母の出産と養育の恩を重視し、子がそれに報いるという双方向的なものであることによる。第五章は、日本に舞台を移し、中世の仏教寺院での二十四孝の語りにおいて、やはり母の恩が前景化していくプロセスを論証する。その中でも、安居院流唱導の祖である澄憲の役割は大きく、「外典」である儒教が父の恩を重視するのに対し、「内典」である仏教は母の恩を重視すると述べ、その後の受容を規定した。第六章は、時代が下った室町期に、五山において二十四孝が追善供養法会で語られた際に、いかなる独自の観点が付け加えられたかを論証する。すなわち、唱導書である『金玉要集』を分析することによって、日本中世の想像力が母の罪業と墮地獄を二十四孝に挿入したと指摘する。そして、結においては、日本中世が二十四孝を図像ではなく語りとして受容した意義が、語ることすなわち鎮魂にあったと結論づける。

第三部「出版メディアの空間」は、近世になって、二十四孝が図像を伴って広く流布していくプロセスとその意義を論じる。第七章は、和製二十四孝図である渋川版と嵯峨本を取り上げ、それらを中国から渡来したテキストと比較対照し、初期狩野派による改変を指摘する。その際、中国のテキストである『全相二十四孝選』の図像を著者自ら北京の中国国家図書館にて探し出し、欠を埋めたことは特筆しておきたい。第八章は、日本的な改変の具体例として、孟宗を雪の竹林において蓑笠姿で筍を掘るイメージに変えた背景に、五山僧の好んだ隠逸的世界観があることを論じる。第九章は、江戸において二十四孝が、井原西鶴『本朝二十不孝』や蘭奢亭薫『二十四孝安売請合』などによってデフォルメされながらも、しかし最終的には孝を実現することが称揚されたため、孝の不可侵性・吉祥性はゆるがなかったと論じる。結では、庶民による受容の一方で、江戸期の儒学者が二十四孝をどう受容したかに目配りし、彼らがそれを肯定と批判の両面から扱っていたこと、さらに明治期における二十四孝批判の様相にまで論を及ぼす。

結論では、孝の表象が東アジアにおいて偏差を有しながらも共通性を有していること、すなわち生命の連続性を個人、国家、社会を貫いて得ようとし、そこには身分や性別を問わない平等性があることを指摘して擱筆する。

本論文は、東アジアにおける孝とりわけ二十四孝を基点としながら、図像資料と文字テキストを同時に扱う「説話表象文化論」を構想したもので、その独創性と総合性は他に類を見ない。また、その研究を通じて、ややもすれば教条的な儒教道徳としてのみ理解されがちな孝に、「共同体原理の核である父母を通じて、共同体原理を脱する」可能性を見出したことは、今日の中国における儒教復興の意義を考えるためにも、きわめて重要な貢献である。

審査においては、墓の機能を昇仙の場だけでなく、死者が一定期間生活する場、さらには子孫と出会う場として理解する必要もあるのではないかと、郭巨や孟宗説話以外の二十四孝説話への目配りがもう少し必要だったのではないかと、日本中世における墮地獄と女人往生の論述が少ないのではないかと、時間性の扱いがややステレオタイプになりすぎているのではないかと、という指摘や疑問も出されたが、いずれも本論文の高い学術的価値を損なうものではないという点で、審査員全員の意見の一致を見た。

以上により、本審査委員会は、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。